



Title	『正治初度百首』 「春」と「秋」の配列：定家を中心に
Author(s)	松本, 成葉
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 6, p. 35-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『正治初度百首』「春」と「秋」の配列

―定家を中心に―

日本文学 博士前期課程二年

松本 成葉

第一章 はじめに

『正治初度百首』は正治二（一二〇〇）年、後鳥羽院によつて下命された百首歌である。本百首は、『新古今和歌集』の撰集資料となるなど、新古今時代の和歌研究上、極めて重要な作品とされている。

百首歌とは、定数歌の一つで、百を定数として詠むものである。百首歌が、和歌の詠出方法として確立したきっかけは、院政期の初めに開催された『堀川百首』である。『堀川百首』は、一首毎に題が設定されていて、歌人はその題に従つて歌を配列した。この形式を組題百首という。

それに対し、『正治初度百首』（以下、本百首とする）は、部立百首という形式である。この部立百首は、「春」と「秋」が二十首、「夏」と「冬」十五首など、大枠として部立と歌数が定められている形式である。その為、題があらかじめ設定されていて、それに沿つて和歌を配列する組題百首と異なり、部立百首では、歌材の取捨選択や配列は、歌人の裁量に任される。部立百首は、組題百首と比較して、歌人としての力量が一層問われる形式であった。

そして、本百首において、主催者後鳥羽院から高く評価されたのは、藤原定家である。定家の本百首歌は、先行研究において「多彩な才能を発揮し始めた粒揃いの作品である」と高い評価を得ているが、配列に注目する研究は、ほとんど行われてこなかった。しかし、定家の本百首の配列は、「主題が異なる和歌であつても前後の歌と共通する詞を詠む」という大きな特徴がある。このため、部立内部に連続性が生じ、各部立が一つの作品として鑑賞しうるものになるのである。ここで重要なのは、定家の配列の特徴は、『新古今和歌集』の配列との類似性が見えるということである。

本発表では、『正治初度百首』の部立の中で、二十首とまとめた歌数を持ち、古来より趣深いとされてきた「春」と「秋」の配列に注目する。定家と他の歌人の比較を通して、定家の配列と『新古今和歌集』の配列との関連を提示したい。

第二章 正治初度百首の配列

1、藤原定家

それでは、初めに藤原定家の「春」の配列の一部みてゆく。

- 1311 百千鳥声や昔のそれならぬ我が身ふり行く春雨の空
1312 有明の月影残る山の端を空になしてもたづ霞かな
1313 おもひたづ山のいづくも白雲に羽うちかはし帰る雁がね
1314 吉野山雲に心のかかるより花の衣は空にしるしも

¹³¹¹ 番歌は百千鳥、¹³¹² 番歌は霞、¹³¹³ 番歌は帰雁、¹³¹⁴ 番歌は花（桜）、というそれぞれ異なる主題の歌が並ぶ。しかし、¹³¹¹ 番歌と¹³¹² 番歌には「空」、¹³¹² 番歌と¹³¹³ 番歌には「たつ」、¹³¹³ 番歌と¹³¹⁴ 番歌には「雲」が共通して詠まれている。これにより、異なる主題間においても和歌の推移に連続感がもたらされる。

次に、定家の本百首「秋」の配列の一部をみてゆく。

¹³⁵⁴ 染めはつる時雨をいまは松虫の鳴く鳴くをしむ野べの色色

¹³⁵⁵ 白妙の衣しでうつひびきより置きまよふ霜の色に出づらん

¹³⁵⁶ 思ひあへず秋ないそぎそさを鹿の妻どふ山の小田の初霜

¹³⁵⁷ 秋くれてわが身時雨とふる里の庭は紅葉の跡だにもなし

¹³⁵⁴ 番歌は虫、¹³⁵⁵ 番歌は擣衣、¹³⁵⁶ 番歌は霜、¹³⁵⁷ 番歌は紅葉、という異なる主題の歌が並ぶ。しかし、¹³⁵⁴ 番歌と¹³⁵⁵ 番歌には「色」、¹³⁵⁵ 番歌と¹³⁵⁶ 番歌には「霜」、¹³⁵⁶ 番歌と¹³⁵⁷ 番歌には「秋」が共通して詠まれている。これにより、春部と同様に異なる主題間においても和歌の推移に連続感がもたらされる。これらの配列的特徴は、「春」と「秋」の全体に見られるのである。

二、後鳥羽院

定家との比較のために、主催者後鳥羽院の「春」の配列をみてゆく。

6 昔よりいひしは是か夕霞かすめる空のおぼろなる月

7 ながむれば雲路につづく霞かな雪気の空の春の明ぼの

8 薄く濃く園の胡蝶はたはぶれてかすめる空に飛びまがふかな

9 なにとなく物あはれなる如月に雨そほ降れる夕暮の空

10 秋とのみ誰思ひけん春霞かすめる空の暮れかかるほど

6 番歌は朧月、7 番歌は霞、8 番歌は胡蝶、9 番歌は春雨、10 番歌は霞、を主題にした和歌が並ぶ。6 から9 番歌全てに「空」が、6、8、10 番歌の第四句には「かすめる空」が共通して詠まれる。前の和歌と同じ詞が共通して詠まれるという点は、定家と同様であるが、定家が一首ごとに通ずる詞が異なるのに対して、後鳥羽院は「空」という同一の詞のみであることが注目される。これは、定家と後鳥羽院の配列に明確な違いがあることがわかる。さらに、後鳥羽院の「かすめる空」は全て第四句目でことも注目される。

次に、後鳥羽院の「秋」の配列の一部をみてゆく。

41 まばらなる榎の板屋に影もりて手に取るばかり澄める夜の月

42 おほかたの秋のなさけの萩の葉にいかによとて風なびくらん

43 薄霧の明石の浦は晴やらでさだかに見えずおきのつり舟

44 くまなしや朝夕霧は晴れすとも桂の里の秋の月影

45 秋の霧の籬にすみ慣れて影なつかしき深山辺の里

41 番歌は「月」、42 番歌は「萩」、43 番歌は「霧」、44・45 番歌は「月」、を主題にした和歌である。41・42 番歌に通ずる詞は見られないが、43・44・45 番歌には

「霧」が共通して詠まれる。

後鳥羽院は、「春」は「空」「霞」、「秋」は「霧」「月」など特定の詞を多用する傾向にある。これは、特定の詞を多用することで、部立内部に一貫性をもたらそうとしたとも捉えられる一方、本百首詠進時に後鳥羽院が初学者同然であつたことを考慮すると、経験のなさから、特定の詞でしか和歌を詠めなかつたとも捉えられる。

三、藤原季経

さらに、藤原季経の本百首の配列をみてゆく。季経は、歌道家・六条藤家の中心人物であつた。この六条藤家は、同じく歌道家で藤原俊成・定家の御子左家と対立関係にあつた。定家の配列との比較のために藤原季経の「春」の配列の一部をみてゆく。

906 子日おなじくは千本をひかん姫小松君が齡の数にまかせて
907 行くままになほ遠さかる霞かな我をこめてや春は立つらん
908 都へと出ではてにけり鶯の谷の古巢は風や守るらん
909 佐保姫の染むる緑を色に出でていつしか見する雪の下草
906 番歌は子日、907 番歌は霞、908 番歌は鶯、909 番歌は若草とそれぞれ異なる主題の歌が並ぶ。前後の和歌と共通する詞は見えず、一首一首が独立して配列されていることが特徴である。

次に、藤原季経の「秋」の配列の一部をみてゆく。

946 浅からず身にしみにける藤袴ひとのぼかりのにほひなれども
947 萩の葉の音せぬ宿にすむひとはただ大方の哀ばかりか
948 暮ぬ間に野原篠原過ぎなまし道さまたげの花の色色
949 白露も浅茅が末に宿りめりいづくを頼む我が身なるらん
946 番歌は藤袴、947 番歌は萩、948 番歌は秋の花、949 番歌は露とそれぞれ異なる主題の歌が並ぶ。946 番歌と947 番歌には「ひと」という詞が共通して詠まれるが、他の和歌には共通する詞は見えず、おおむね一首一首が独立して配列されていることがわかる。これは、「春」「秋」全体の傾向である。また、紙面の都合上取り上げなかつた他歌人の配列も、一首一首が独立して配列されたものであり、定家の配列的特徴は定家独目のものであつたことが判明した。

第三章『新古今集』の配列

『新古今集』の配列は「きわめて複雑・重層的」¹¹⁾であるとされる。では、具体的にはどのようなものであるか、はじめに「春」の配列の一部をみてゆく。

- 17 谷河のうち出る浪も声立てつ鶯さそく春の山風
18 鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉白き逢坂の山
19 春きては花とも見よと片岡の松の上葉にあは雪ぞ降る

20 卷向の檜原のいまだ曇らねば小松が原にあは雪ぞ降る
17・18 番歌は鶯、19・20 番歌は残雪が主題の和歌が並ぶ。17 番歌と 18 番歌は「鶯」「山」、18 番歌と 19 番歌は「降る」「雪」「葉」、19 番歌と 20 番歌は「あは雪ぞ降る」が共通して詠まれる。これにより、異なる主題間においても和歌の推移に連続感もたらされる。

次に『新古今集』「秋」の配列の一部をみてゆく。

327 たなばたは今や別るる天の川河霧立ちて千鳥鳴くなり
328 河水に鹿のしがら掛けてけり浮きて流れぬ秋萩の花
329 狩衣われとは摺らし露しげき野原の萩の花にまかせて
330 秋萩を折らでは過ぎしつき草の花摺り衣露に濡るとも
327 番歌は七夕、328 番歌から 330 番歌は萩が主題の和歌が並ぶ。327 番歌と 328 番歌は「河」、328 番歌と 329 番歌は「萩の花」、329 番歌と 330 番歌は「萩」と「露」が共通する。これにより、春部同様これにより、異なる主題間においても和歌の推移に連続感もたらされる。

第四章 おわりに―『新古今集』く―

第二章、第三章から、定家の本百首の配列と、『新古今集』の配列は共通していること、さらに他歌人の配列との比較により、定家の配列が独自のものであることが明らかになった。

さて、定家は、本百首で主催者後鳥羽院から和歌を高く評価され、昇殿を許されることになる。そして、この昇殿を機に、定家と後鳥羽院を中心とした後鳥羽院歌壇は急速に形成され、『新古今集』編纂への道のりがはじまる。

『新古今集』の実質的な選者であつた後鳥羽院は、配列構造にこだわり続け、自ら集作成に尽力した。それは、『新古今集』の撰集過程が①（選者らによる）選歌時代、②院の選歌時代、③部類時代、奏覧、寛宴、④（院による）切継補訂時代の四期に分かれることから見てとれるⁱⁱⁱ。この、後鳥羽院の配列意識、ひいては『新古今集』の配列は、何によつて形成されたのだろうか。

後鳥羽院の和歌始発である本百首の配列は、『新古今集』の配列にみえる、複雑・重層的配列とは言い難い。それと比較すると、定家の配列は複雑・重層的配列であり、『新古今集』の配列と共通するものがある。

本百首における後鳥羽院の定家評価は、和歌であつたことは言うまでもないが、定家が独自の配列であつたを加味すると、後鳥羽院が配列に目を開ききつかけになつたのではないかと考えられる。

和歌の本文引用と歌番号は、全て『新編国歌大観』によつた。なお、引用に際し、適宜表記を改め、濁点を私に付した。また、傍線・圈点・囲み線も私に施した。

ⁱ 山崎桂子『正治百首の研究』（二〇〇〇年、勉誠出版）、二二二頁。

ⁱⁱ 浅田徹・藤平泉編『古今集新古今集の方法』（二〇〇四年、笠間書院）、三三三頁。

ⁱⁱⁱ 有吉保等著 鑑賞日本の古典 9 『新古今和歌集・山家集・金槐和歌集』（一九八〇年、小学館）、「新古今和歌集」解説、二〇～二二頁。